

編集室から

今年は、春先から初夏にかけて気温が上がらず雨気味でした。畑の作物も大きくなり、丈母も嘆いていました。ところが梅雨が明けると一変して少雨に猛暑。それは殺人的ともいえる高温で各地で記録を塗り替えるほど。そして、お盆が過ぎた途端、こんどは高温のままの多雨。ゲリラ豪雨が各地で相次ぎ、大変な災害・ご苦労に遭われた方も多いという、とんでもない気候の連続の日々。だったのではないのでしょうか。

各地で被災された皆様に心より、お見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復旧・復興を願っています。

私事ですが、先月末、母方の祖母が百三歳で大往生を遂げました。

久々に集まった親戚・従兄弟・従姉妹と話しているとき、ふと「祖母がこの世に生まれて来て、母・叔父・叔母を生んでくれ、そこからのご縁をつむぎ、僕ら従兄弟たちが生まれている」という「当たり前」のことをふと思い当たりました。そしてそれらは、実は当たり前ではなく、奇跡的な確率で起こっていることにも気づきました。

逆に言うと、「一人の人間が生まれてこない」と、そこから先の血縁は生じない」とも言えます。

そして自分たちの子は、孫を産み、やがて子孫へと連綿とつながっていきます。

これは事業も同じで、社会という池に投げた一つの小石に過ぎなくとも、波紋は広がり何らかの影響を与え続けます。「大きな流れの中の存在」を感じた瞬間でした。

またそれは、自分という存在の掛け替えの無さであり、ご縁ある事業の存在価値でもありませんが、その価値は全員・全事業が等しく持っているのです。(は)



のと
だらぼち

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川島さんが「能登だらぼち」を引き受けて改装開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

のと だらぼち
03-5537-3078
17:00~23:00 日曜祝休

中央区銀座8-4-27
プラザ銀座ビル地下1階
(銀座外堀通りasics前)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2019/09
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp

2019/09
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

長月

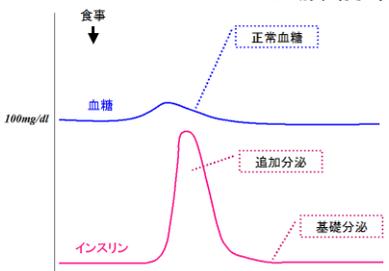


滋賀県・信楽陶芸村にて
by hama

前回は込み入った話だったので、簡単に復習をします。口から入った糖質は消化管内で分解されて、ブドウ糖として腸から吸収されます。腸から吸収された栄養分はすべて、門脈を通ってまず肝臓に注ぎ込み、それから全身に広がってゆきます。ブドウ糖は食後一過性に門脈内で著しい高濃度になるのですが、脾臓から放出されたインスリンの働きで過剰分は肝臓というダムに蓄えられ、その下流にある全身の臓器は常に一定濃度の血糖を供給され続けます。あなたが糖尿病ではないとしたら、それはこのような状態が保持されているおかげです。

そのことをグラフにしてみました。青い線は、肝臓を通り過ぎた後の腕で採血した血糖値です。そして赤い線は、脾臓から放出されるインスリン量を示しています。横軸は時間です。

糖尿病ではないヒトの血糖値は、空腹時なら 100mg/dL 前後でほぼ安定しています。空腹時のインスリンも、前回お話ししたように、基礎分泌と呼ばれるごく少量が持続的に放出されているだけです。余談ですが、この少量のインスリン基礎分泌は、空腹時の血糖維持だけでなく血液中の脂肪を維持するうえでも極めて重要です。一型糖尿病に



なつてインスリンが体内で全く作られなくなってしまうと、身体中の脂肪組織がどんどん分解されてしまいます。インスリンは、エネルギーを細胞の中に蓄えるためのホルモンという事なのでしょう。ついでに、細かいことをもう一つ。“Insulin”の発音は「インスリン」であつて「インシュリン」ではありません。そして強勢は最初の「イ」にあります。是非これからは「インスリン」と発音してくださいね(yo)

話を元に戻します。食事をすると、内容に応じて多少の差はありますが、しばらくすると青い線のよう血糖値は上昇し始めます。腸から吸収されたブドウ糖の一部が、門脈から肝臓を通り抜けて全身に広がってしまうからです。でも脾臓の機能が正常であれば、この僅かな血糖上昇を瞬時に感じ取って必要量のインスリンを急速に放出します。赤い線の急峻な上昇が、追加分泌です。

追加分泌を可能にしているのは、脾臓が常にインスリンを産生して備蓄している。僅かな血糖上昇を瞬時に感じ取ることができる。二つの能力です。

残念ながら我々日本人の多くは、この二つの能力が共に生まれつきの問題を抱えているようです。そして加齢によって、この能力は共に衰えていきます。さらに生活習慣によって、その衰え方が全く異なることも判ってきました。次回は、その話を。



【プロフィール】
（いがき としお）金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とつても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松で又クヌクしています。

濱の起業塾 五『機会』

「好きなこと」「得意なこと」「稼げること」は、それぞれ異なる特質だ。

内なる資産は、これらのうち前二者を明らかにすることである。

後者は、起業の種として次の段階で得られるものだ。よく、「好きなことを仕事にしたい」という要望を耳にするが、とりあえずこれは理想だと考えておいたほうが良い。志は素晴らしいが、事業として成立しにくいネタやビジネスモデルで起業してしまった場合、経済的に回らず数年で断念せざるを得ない事態は容易に予想される。

少なくとも「好きなこと・得意なこと」と「稼げること」とは別物として取り扱った方が、事業を起動に乘せやすい。

私事で恐縮だが、エクセルでデータを整理したり簡単なプログラムで処理を迅速に行うこと、プログラム言語とデータベースを駆使して高度なWebシステムを構築することは、得意であり集中できることであるが、「好きか」と問われると、それほどでも

ない。パワーポイントでプレゼンテーション資料をビジュアル化することは得意であるし、好きでもあるが、デザイン的なセンスがどうも不得意だ。新しい概念や考え方をアドバイスしたり、研修プログラムを開発して実施することは得意だし好きな仕事だ。という風に、「好きなこと」と「得意なこと」も異なるし、まして「稼げること」と、それらは別なものである。

「好きなこと」と「得意なこと」は、できるだけ重なる領域が広いほど、「稼げる」領域とも重ねやすい。すると、「好きなこと」を拡げるか、「得意なこと」を拡げるか、いずれかである。ところが、「好きなこと」と「得意なこと」を混同している人が少なくない。

得意なこととは後天的にそうなったものである。一般的に、七千〜一万時間従事するとそれを体得でき、得意分野の仲間入りができるという。

「好きなこと」は、「自分らしさ」の意識から生じている。なにが自分らしいと感じているのか、客観視できると、その「自分らしい」と思っている領域自体を拡げていくと、必ずから「好きなこと」も拡がり、変えていくことができる。

2011年12月から2014年11月まで、2005年から2006年にかけて経験した出来事を20編に渡り綴らせていただいた。この、シリーズ「会社再建の当事者として¹⁾」は、ある日突然、平社員から取締役、会社経営の傍観者から民事再生手続の”当事者”となり、奮闘する私自身の渾身のノンフィクションである。

その会社を退職してから9年になろうとする本年7月に、「創立50周年記念祝賀会」の招待状が届く。9月初めの開催（この執筆はその前）。早速、出席の返事を出す。

50年という歴史の重みを感じるとともに、それが潰れてしまいかねない瀬戸際に立っていたという事実に、今更ながら身震いする思いだ。

実は本年3月、一つの依頼があった。

「『会社再建の当事者として』の一部を50周年記念誌に引用させてほしい」

一度倒産したという黒歴史については、忘れ去りたい現社員・元社員・関係者や、あまり興味がないと思われる新しい社員も多いと思われる。一方で会社の重要な転換点および原点として、今の会社においても間違いなく位置付けられるとともに、経営の失敗とその後の再建という経験は、貴重で他のどのようなものとも変え難い教訓であろう。そのDNAとも言うべきものが、会社再建を知らない経営陣や社員に引き継がれていく一助として、拙文がお役に立つのであればとても嬉しい。

しかし「会社再建の当事者として」はあまりに生々しい。現経営陣の”当事者”はアクセルを踏みがちな性格であるが、会社公式の冊子であるからさすがにブレーキをかけるであろう。差し障りのない一部の引用にとどまると思われる。読むのが楽しみであるが、冊子を開くときには恐らく少し緊張するだろう。

私の場合、元取締役・元社員として招待をいただいているが、元”当事者”としての意味合いもあるのだろうと勝手に感じている。祝賀会では、私をはるかに超えた重要かつ個性的な”当事者”が多く待ち構えているはず。ただただ待ち遠しい。出番はまずないと思うが、万が一振られた場合に備えて、スピーチの準備をしておこうと思う。

注1) <https://www.amazon.co.jp/dp/B01C2H47GG/>
ref=cm_sw_em_r_mt_dp_U_EKizDbCC2R5P0

（前号からつづく）

(2)警備のボランティア組織化

警備費用の高騰に対してダイレクトにコストダウンにつながるのがボランティア組織での運営です。

地元住民の方々としも花火を楽しみたいという思いもあるでしょうが、町会で当番制にするなど、地域行事を継続させるための手段としては有効だと考えられます。

(3)無料コンテンツからの脱却

根本的な問題でもあるのが『ほぼ全員がタダで見ている』という点にあります。

地域のお祭りとして元来の趣旨とは異なるかもしれませんが、やはり投資(費用)に対して対価(収入)がないモデルは衰退します。

花火を観覧できる場所(河川敷など)への入場を有料化するのは必須だと思われれます。

たとえそれで来場者数が減ったとしても固定費は変わらないので、無料開放するよりは収支が改善できます。

それと並行して、地域の花火大会開催までの経緯を映像コンテンツとしてYoutubeで公開するなど、

新たなコンテンツビジネスとしての可能性もあります。

能登の祭りにフューチャーし準備期間など1年間の地域の人々の『祭りを中心とした』生活を映像コンテンツ化した

『能登のワイルド』とかはひとつ参考になる事例かと思えます。

花火職人も高齢化と継承問題が顕在化しています。花火大会がなくなると商売としての機会も損失するわけで、継承問題に更に拍車がかかるかもしれません。夏の風物詩として子供・孫の世代まで残すべきものとして、『これまでのようにはいかない』ということをもみんなが理解すべき時代になりました。それは働き方や年金など日本の社会的問題とも共通しているのだと思います。（了）

『富士の国から ~大魔神のたび~』ギリシャへの旅(2019.8.6~12)
静岡県小山町まちづくり専門監 溝口 久

小山町に来て以来、夏休みには海外へと、これまでハルピン、ロシア、シンガポールに行った。

「今年は欧州に行きたい」と学生に戻り夏休みを自由にとれる長女に言った。「ギリシャにしよう、まだ行ったことないから」とのこと。早速いつものごとく「旅工房」のサイトから予約を入れた。家族旅行はビジネスクラスで行くと決めている。最安値を探しての検索は楽しい。8月6日発8日間で43万円、他の旅行社に比べるとかなり安い。航空会社もトップ3には必ず入ってくるカタール航空となれば、これしかない。ホテル3泊についての価格だ。これに現地ツアーを「ベルトラ」のサイトから2コースに予約を入れた。8月8日に、アルゴリス地方1日観光ツアー 世界遺産ミケーネなど遺跡の宝庫を堪能！<日本語/昼食・送迎付/アテネ発>、8月9日には、サロニコス諸島3島巡りクルーズツアー、アギストリ島・モニ島・エギナ島<昼食付/ホテル送迎可/アテネ発>だ。

この二つのツアーで4万円となる。二人で100万円かぁ。

8月6日18:40八重洲口から成田まで900円のバスに乗り、予め空港第2ビルに送っておいたスーツケースをとってチェックイン、今やEチケットはいらない。ただパスポートを出すだけだ。「さくらラウンジ」でビールと軽く食事をした。

22時20分発の飛行機への乗り込みは一時間も前から始まる。席に着くとワインリストから選んだスパークリングワインが運ばれてくる。以前ドバイに行くのに乗った機材と異なり、個室化が進んでいる。フルフラットにはなるが少し狭い。食事は和洋の選択ができる。日本から飛んでいくので、行きは和食、帰りは洋食と決めていた。軽めの量で助かった。24時頃の食事、そして睡眠、7時頃の朝食、ドーハに着いたのは日本時間で9時頃だから、11時間ほど機内にいたことになる。ドーハに着いたのは現地時刻で3時、空港内の店は全て開いている。アテネ行きの飛行機にはまだ5時間以上ある。ラウンジでシャワーを浴び、旅紀行を書きつつ待つことにした。日本のラウンジに比べ桁違いの広さ、レストランもニヶ所、至るところにドリンクコー



ナーがある。加えてパソコンが並ぶビジネスルーム、ゲーム、祈りの部屋、ソファのバリエーションも多い、仮眠ルームももちろんある。待ち時間の長さはあまり感じる事無く、ドーハからアテネに向かって飛び立った。かつてドバイへの旅の時に乗った機材と同じもの、席はゆったりしているが隣が他人だと少し居心地が悪いかな。ロゼのスパークリングの後にはワインリストから数種を頼み、料理を楽しむ。終わったかと思ったら、チーズは如何？と訊かれ普段口にしない味を口にした。ラウンジ含めて胃への負担が大きくなっている。

眼下に目をやると一面砂漠の中に道が走りオアシス的に街がつくられている。都市計画的な面整備がしっかりと見える。相当な技術と資金が無いとできないような代物ではない。地上で見たいものだ。



アテネ国際空港に14時頃着、日本とは6時間遅れの時差がある。暑さは日本程ではない。空港からアテネゲートホテルまでタクシーに乗り込む。38ユーロにチップをプラスし40ユーロ、定額になっている。空港での両替は1ユーロ150円の計算で、究めて割高、このところの急な円高で120円を切っていると言うのに。成田でしておくべきだった。ただ、ギリシャ国内で現金を必要としたのはタクシーのみで、キヨスクでもカードでオッケーだった。チェックイン後、すぐに街に繰り出す。ホテル目の前にゼウス神殿の列柱が目に入る。日中の熱さを避けたいところだが、日の入りは20時30分頃で、まだまだ陽は高い。かつて104本もの列柱があったと言うが今は15本。紀元前5世紀に着手、完成時の2世紀にはギリシャはローマ帝国になっていた。次に向かうは、アテネに来たらだれもが行くアクロポリス遺跡、19時頃から行った方がいいとのタクシードライバーのアドバイスに従うこととし、まずはアクロポリス博物館に行くことにした。2009年開館、パルテノン神殿の装飾、彫像を見ることができる。自然光の取り方が巧みだ。三階建ての床の隔てを巧みに回避するようにガラスの床が配置されている。スカートの中が丸見え何てことはこの次だ。一階のガラス床の下には遺跡そのものを望むことができる仕掛けになっている。2階テラスにはパルテノン神殿のある丘を一望できるレストランが用意されている。日によっては24時まで営業しているとのこと。遺跡を学ぶだけでなく楽しむ仕掛けがいいねえ、当然ライトアップもされている。

